
休憩を終わらせる唯一つの方法

樹板 形似太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

休憩を終わらせる唯一つの方法

【Nコード】

N3960Z

【作者名】

樹板 形似太

【あらすじ】

人間、誰もいつかは死ぬ。果たしてそれがいつなのか、どういう状況で、何が原因でなんて事は実際起きてみないと誰にも分からないし、それこそ神のみぞ知るってヤツだ。今重要なのは其の事後、死んでからだ。そこまで宗教に熱心でじゃ無かった僕でも知ってるし、幼い子供でも知ってること、それは……善人は天国又は極楽へ、悪人は地獄へという人類の基本的思想だ。まあ、死後の楽しみをネタバレさせるのも何だけど……実際、そんな世界は無いだよ。

ロングプロローグ 未知数な定理（前書き）

アットノベルスにて連載していた「れすとえんどうえ〜」の改善版。ストーリーは大幅に変わります。こちらは完結します。

ロングブローグ 未知数な定理

朝、目が覚めたら、部屋に見た事の無い美少女が居た。

「こんな事を誰か言おうものなら「良い精神科探してやるよ!」と返って来る事は間違いない。そんなレアなイベントはまず現実で起きないし、もし起きてしまったならそれは単なる死亡フラグなのだから問題は無いはずだ。」

真つ当たる凡スタイリッシュな男子高校生、福島銀寺はそういう至極一般的な考えの持ち主だった……、目覚める前までは。

「俺はきつと夢を見てるに違いない。もし現実でも夢という事にしてください神様」

「……? 不思議な第一声を放つのね、あんた」

腰まで伸びるポリウーミー且つ艶やかな長髪と強気な光を含む切れ長の瞳を持ち、白が基調のブラウスに青黒チエック柄のスカートという清楚なセーラー服を身に纏う少女は長く細い眉を怪訝に顰めさせ、目覚めたばかりで横になっている福島銀寺一六歳を見下ろしている。

「不思議? 本当に不思議なのはさ」

言い掛けた言葉を区切り、若干癖毛質な短めの髪をガシガシと掻き毟りながら銀寺は思考を巡らせる。

服装は寝た時のまま、とりあえず靴が欲しい。

海外輸入の激安ファッションセンターで購入した無地の黒Tシャツに白いラインが縦横無尽に走る紺色のジャージを履いている裸足の銀寺は目を瞑り、思考を続ける。

昨日は確かに僕の家で寝た。

銀寺は昨夜、レンタルショップから借りてきた海賊の壮大な物語がテーマのDVDを借りてきて友達数名と自宅で鑑賞した後、トランプの神経衰弱をしている内にほぼ全員同時に寝落ちしたのだ。

その先、その先は。

「どつやったらこんな事になるんだよおお！」

解答不能な現実には喘ぎ、固く握りしめた拳を地面へと叩き付けて銀寺は叫んだ。黄褐色の砂が宙へ舞い踊る。

太陽の輝きが東の空低くに見え始めている全体的に薄紫色をしている広大なグラウンド、四方は並木……いや、もはや林とも見えるそれに囲まれており、遠く南の方向には校舎と思しき巨大な木造の建物が建っている。どの切り口から眺めようとも、昨日銀寺が眠りに就いた賃貸アパートの1DKには見えない。

「何、あんた知らないの？」

少女が肌寒いそよ風に髪を弄ばれながら口を開いた。

「知らないって何、何な訳？ 目覚めると知らない学校の敷地内で寝ていて平然と拳銃を握る女の子が傍に立っているとかどんなピーツなんだ！」

「はあ？ 何言ってるのよ、全く……普通早朝にこんな所で仮りざしたら死んでて当たり前なのに、感謝の言葉は無いの？」

「ありがとう、そしてさようなら」

漆黒の二丁拳銃を握り締めている少女から、現実から逃げるように、銀寺は体を起こして早々に立ち去ろうとする。

「どこ行く気？」

「俺の家に帰るんだ、非現実もう懲り懲りなんだよ……」

「ふーん、良く分からないし、止めはしないけど」

少女は一旦言葉を区切り、銀寺の困惑した顔を見た。

関わったら間違いなく死ぬ、纏ってるのがあいつと同じ空気がじゃないか。

銀寺はとある女の子の姿を脳裏に浮かべながら、目の前の無表情に近い少女の顔を睨み返し「じゃ」と言い、右手を上げて、踵を返した。

「……帰り道なんて無いし、死ぬわよ？」

少女はだらんと下げていた腕を胸の位置まで上げ、銃のリヴォルバーを親指で押し込む。

その言葉と動作に気も向けず、いや、向けられず……今現在、振り返った銀寺の視界に写っているのは、剥き出しの鋭牙だった。「うわ！」

咄嗟に顔を腕で覆う銀寺。断片的に見えたごわごわとした獣毛、牙と同じく鋭く光る爪。

死ぬ、という純粹たる直感が彼の脳髓を冷たく過ぎる。

だが、噛まれるならせめて腕からと銀寺が覚悟したその刹那、一発の銃声と獣の断末魔が彼の鼓膜を激しく震わせた。

「はい、本当ならゲームオーバー」

続いて二発、三発と銃声が鳴り響く。

顔を覆っていた腕をどけた銀寺の一メートル程前方には、頭と両の左脚から鮮血を流す狼のような生き物が斃れていた。

ピクリとも動かないそれ。牙が口から食み出るほどに発達しており、噛まれるとただでは済みそうにない。

「感謝の言葉は？」

腕をやや内側に曲げて伸ばし、手首の位置で交差させて薄い硝煙の上がる銃口を突き出す少女は振り返った荒い息の銀寺に、唇から舌をチロリと出して見せる。

「あ……ありがとう……って、ここ日本……だよな」

日本では既に絶滅しているはずの狼、たまたま動物園から逃げ出したという考え方も出来るが、タイミングがタイミングでありそれは都合が良すぎるというものだ。

「んー、説明してあげても良いけど」

少女の言葉を、猛々しい発砲音が遮る。

再び、それとほぼ同時に銀寺の背後で狼の断末魔と地面に重い物が落ちる音。

振り返るとそこには、地に斃れる狼が一体。

「ここは危険だから、さっさと本リザして来なさい」

「本リザ？」

「ようこそ、休憩世界へ」

再三、弾丸を撃ち出す銃声が静かな世界に染み渡る。

「ぐつあ……えび、」

しかし、勢いよく血を吹き出したのは、水を失った魚のように口をパクパクと開閉する銀寺だった。

咄嗟に手で抑えようとしても、左胸の丁度中心から溢れ出す鮮血は止め処なく指の隙間から零れていく。

膝を折り、銀寺は何の足掻きも出来ずに地面へと斃れ込む。

「そして行ってらっしゃい、合格率九%のレストテストへ」

少女はスカートを捲り、両足の太腿に巻き付けていたホルスタールに銃を押し込み、一滴の血痕も見当たらない何も無いグラウンドに向かい、静かに、そう呟いた。

ロングブローグ2 定理のヒント

「 福鳥銀寺、以降識別名称及び受験番号八〇九。死亡前一七歳、身長一七四cm。八〇九が一〇歳の時に両親は他界しており死亡前は奨学金援助を受けて高校へ通う、取り立てて長所も短所も無い高校一年生」

「おい」

「八〇九に対し唯一の長所として挙げるとするならば、鍛えられた強靱な肉体」

「脳筋みたいに言うなよ！」

白く白い白いだけの世界に、割と細見である銀寺の言葉が木霊する。果たして立っているのか、浮いているのか沈んでいるのかすら、単色で境界線の無い世界では判断できない。四方八方純白、虚無とも言える異様な空間。

彼の胸には先程空けられた風穴は見当たらず、それどころか着ている黒Tシャツは破けても無ければ血塗れてもいない。

「おや、仮リザ時はあんなに慌てふためいていたのに、もう良いんですか？」

「どう反応していいか分からなくなった」

「まあ、人間は自分の把握能力の限界を超えるとパニックになるか慣れるかのどっちからしいしな」

下の感触を確かめるようにコツコツと素足の指先で突く銀寺の前には、二人の男女が立っていた。

「申し遅れました、私はジョーカー、人間の皆さんには黒天使と言われています」

真っ直ぐに、まるで漆黒の刀剣のようにも見える長髪を持つ女性
が、黒水晶のような瞳の垂れた尻を優しく綻ばせて腰を半分
に折る。着ている服は、その細い体のラインを際立たせる純黒のタイト
ワンピース。

「ああ、俺はチビとでも呼んでくれ。こいつと同じ黒天使だ」

ジョーカーを指差しながら気さくに言った、同じく漆黒の短い髪をした男性は銀寺に手の平を見せるだけの挨拶をした。若干釣り目黒い瞳は射抜くように銀寺を見据えている。服装は、普通見かける事の無い真つ黒な体操服と真つ黒なジャージズボン身に纏っており、身長は控えめで銀寺より頭一つ分低い。ジョーカーと並ぶと丁度同じくらいの背丈だ。

二人とも歳は二十半ば程に見えるのだが、そもそも天使に歳は有るのか？ と銀寺はふと考えたが、わざわざ聞く事でもないと別の事を口にした。

「ここ、というより一体全体俺はどうなってるんだ？ 死亡前がどうとか言ってるのが果てしなく怖いんだが……」

「ああ、そうかそうか、明け方で寝てたんだな。八〇九、お前はもう死んでるぞ？」

「……おかしいな、あれ、おかしいな。全く驚かないんだけど」
死亡宣言を受けた銀寺は全く表情を変える事無く、チビを見詰める。

「深層心理で覚悟していたんじゃないですか？ まあ、ここまで来ておいて、死んだことに愕いて騒ぎ立てるような人の方が結構少ないんですけどね」

「そう……なのか。一応聞きたいんだけど、何で俺は撃たれたのに生きてる……というよりはこんな場所に居るんだ？ 後、一緒に友達も寝ていたはずだけど死んだのは俺だけなのか？ 後」

「まあ待てよ、順序立てて説明してやるから」
早口で聞きたい疑問を述べる銀寺をチビが口を挟んで制止させ、間を少し開けてからジョーカーが口を開いた。

「まず、貴方のご友人は全員生きています。この、正式な呼び名は有るんですが今は分かりやすいように、仮に死後の世界と呼んでおきましょうか。死後の世界に来たのは貴方だけとなります」

「え？ それってまさか……」

ふと、銀寺の頭に最悪の死因が浮かぶ。

あいつ等が……俺を？

しかし返ってきた答えは別の物だった。

「死因は震度三の地震による事故死です」

「ああ、何だ良かった……って良くない！ 何で震度三なんかで死んでるんだよ！」

銀寺は腕を大きく左右に広げてジョーカーに訴える。

「箆笥の上に置いていたダンベルが丁度貴方に落ちてきて頭蓋骨が割れ、脳にまで衝撃が達して死に至ったのです。今度からは箆笥の上なんかには何も置かないようにしましょうね」

「今度つて言われても……俺死んでるんだろつが……」

無意味に等しい忠告に銀寺は頭を右手で抑えて苦悩の表情を浮かべる。

死因がしょぼ過ぎる。

まさか自分がそんな馬鹿な死に方をするとは頭の片隅にも思っていなかった銀寺には、どうリアクションを取るべきかが分からなかった。

「チツチツチ、確かにここは死後の世界だが、お前はまだ生き返るチャンスが有るんだよ」

人差し指を顔の前で左右に振り、チビが狼狽える銀寺に救いの言葉を放った。

「え？ 生き……返る？」

「ああ、この世界は天国でも地獄でも無い。言わば蘇生資格を手に入れる為の場所、休憩世界だ」

「休憩世界……？ 何だよそれ、蘇生に資格？」

「大まかな説明はまた後で、その際に貴方が撃たれたのに死んでいない理由も話しましょう。まずは」

「まずは？」

ジョーカーは言葉を区切り、顔に『？』を張り付ける銀寺に優しく微笑みを投げた。

続いてジョーカーはチビに目線を送り、それをチビは頷きで返す。
「貴方がこの世界で使う、パートナーとなる武器を選んでください」
「まあ、結局どれも極めたら変わらないだし、言わばオンラインゲームの最初の職選びみたいなもんだ。適当に自分の好きなやつ選べよ。下手に銃とか選ぶと扱えない時に後悔するぜ？」

ジョーカーと、天使らしくない例えを挙げるチビはそう言い、左右対称の形で片腕を外側に大きく広げた。

そうして、音も無く世界に不意を衝いて現れたのは、多種に渡る何万何千大小様々な武器であった。

「う……うわああ」

思わず感嘆を、あんどりと呆ける口から零す銀寺。

すげえ。

その様はまさに圧巻、肌を痺れさせる程の威圧。

先程から何も無かった空間に突然物が溢れたから、ということも有るであろうがそこには宛ら実際はゲーム等でお目に掛かれなような武器ばかりだった。

重そうな巨大戦斧、弾は見当たらない荘厳とした雰囲気を持つ機関銃、果ては小さなナイフといった武器から、大きな盾やけん玉といったどう戦えばいいのか計り知れないものまでが微妙に宙に浮いて並んでいる。

「すげえ量……あ、聖剣エクスカリバーとか黄金銃とかは無いの？」

「そんなチート武器ねえよ」

銀寺のポケに即座に突っ込みを入れるチビ。ですよねー、と笑いながら銀寺は口元を押さえた。

こんなに有ると流石にすぐには選べないな……にしても多い。大量の装備を前に行ったり来たりと右往左往を繰り返す銀寺。

暫く二人とも黙ってそれを眺めていたのだが、遂に痺れを切らしたらしく、

「なんか部活とかはしてなかったのか？」

「あー、俺はシャイニング帰宅部」

「何かしてるよな……」

会話はすぐに終わってしまい、止めた足を再び動かして左右に歩く銀寺。

見果てるまで続く武器のランウェイ。

何時間掛ければ見終わるのか、ただ銀寺自身は苦痛に思っては居ないらしく、表情を輝かせて「うわ、カッター」等と呟きながら鑑賞を続けている。

「これなんてどうですか？」

「ん？」

いつの間にか傍に来ていたジョーカーに向けた銀寺の目があるものを捕捉した。

「日本刀かぁ、切れ味良さそー」

ジョーカーの手に握られた白刃煌めくシンプルな日本刀。試しに振ってみようかと思いついた銀寺は有る事に気付き、首を傾げた。

「思ってたより軽い、手に馴染むというか何というか……」

「全ての武器は重さを軽減されていて、使う者が扱い易い重さに調整されてるんですよ」

「へー……、でも他のも見えていい？」

「構いませんよ」

話しながら一振りだけした日本刀をジョーカーに返し、再び銀寺は歩き始めた。

「あー、退屈」というチビの呟きは銀寺には届かない。

「ん……？ これって」

ふと、一つの武器の前で銀寺は立ち止った。

「確か、蛇腹剣だっけ」

「よく御存知ですね」

「魔物と戦うゲームで使ってたんだ。物理攻撃なのに攻撃範囲が凄く広いんだよなあ」

昔を懐かしむように子供の様な無邪気な笑顔を浮かべた銀寺は、

一メートル程の白銀に光る、刀身に幾つもの節が横走る剣を手に取った。

そして、「よっ」と息を短く吐いてそれを何も並んでいない空間に向けて振る。

シャシャシャーン、という耳障りの良い軽音を響かせて剣はバラバラに分離した……ように見えるも、中に通っている一本のワイヤーが刃と刃を繋いでおり、綺麗な弧を描いてそれは宙を舞う。

握った茶色の柄に見え難くされた同色の突起があり、それを親指で押すとワイヤーが柄の中に巻き戻され、再び歯切れの良い音を鳴らして元の剣の状態に戻った。

「柄の底にも節があるのを見えますか？ それを半回転させるとワイヤーが固定されて普通の剣としても使えますよ」

「へえ……便利だな」

福島は言われた通りに柄の底辺に有る節を回すと、ワイヤーを固定する為の力チツという音が鳴った。再び剣を振るも、今度は分解せずにキレの良いか風を切る爽快な音が鼓膜を震わせる。

「決めた、俺これにするよ」

「そうですか、了解しました」

銀寺の満足そうな声色を確かめたジョーカーは指同士をパチンと合わせ弾いた。

特に何かが変わった様子は無いが、チビは首を左右に振ってコキコキと骨を鳴らしながらジョーカーの隣に並ぶ。

「それがお前が生き返る為の相棒だ、変更は聞かないからな」

「相棒、ってやっぱりさつきグラウンドに居た狼とかを倒すのか？」

「ん……、まあそういうことなんだが」

「これからの試験如何ですけどね」

「試験？」

試験、という言葉聞いて咄嗟に表情を暗くする銀寺。

俺は、もしかしたら死ぬかもしれない。

筆記だと。

「私達のどちらかと、武器を使った戦闘試験を行って貰います」

「へ？ 戦闘試験？」

間の抜けた銀寺の声にジョーカーは頷き、右手を上挙げて。

チビはそんな言葉にクスクスと笑いを我慢しながら、同様に虚空へ両手を突出し、

「「コーリン」」

「ねっむー……」

とある一室に敷かれた布団の上に座っている、乱雑に上を向く茶色く染まる短髪を頭に生やす、眼付きが非常に悪い少年が欠伸をしながら腕を突き出して体の関節を伸ばす。

黒く派手な模様が印象的な白地Tシャツの上に若緑色のジャケットの袖を腰の位置で巻き付け、下半身には布の裂けているダメージジーンズを全体的に余幅を持たせて着こなしている。

「七時半」

木と鉄脚で作られたオーソドックスな椅子に座る少女が凜とした声で極端に簡潔に時刻を述べる。何に対しても興味を示さなそうな冷たい光を含む深紅の瞳、黄色のストラップリボンで頭の左右に綺麗な赤い髪を結っている、諸葛ツインテールの目鼻立ちが整った少女である。向かう同様の机には小さな自立時計だけが置かれており、秒針が小刻みに正確に動くそれをひたすらに見詰めている。服装は拳銃を握っていた少女と同じセーラー服だ。

二人とも自宅の様に暮らしている割には、しっかりと何ら変哲のない上履きを履いている。

「そっぴゃあ、静寂とかは居らんけど何所行つたんや？」

部屋の中を見渡しながら少年は訛りのある口調で少女に尋ねた。

本来は授業などを行う教室の様だが、幾つも並べられているはずの机は三組しか無く、代わりに隅で畳まれて積み上げられている敷布団や歯ブラシ等の小物、何故か鍋やガスコンロといった日用品に

溢れており、元の名残は教室の前に備え付けられている黒板しか無いのだが、そこにも幾つか落書きのような言葉が書き殴られている始末だ。

「新参、歓迎準備」

「おお！？ なんやなんや、久しぶりに新しい奴来たんか！ そんなら、此処居らんそいつもその準備手伝つとるんか？」

少年は興奮した面持ちで立ち上がり、時計を見る少女の返答を待つ。

「試験中」

「……………へ？ まだ合格した訳ちゃうんか？」

少年の力の抜けた言葉に首を小さく縦に振って少女は応じた。

「マジかー、んまあ……………期待持てそうやから歓迎の準備しとるんやろ？ 見つけたんは三日月か？ それか朱雀か？」

「しじまん」

「ほー、静寂が見付けるて珍しいな」

「早朝、たまたま」

「ふーん、まあ静寂が太鼓判押すなら帰ってこれそうやなあ！

あいつ何か言つとったか？」

正反対のテンションの二人だが会話は成立しているようで、少女は初めて時計から視線を動かし、少年の瞳を見据えて、一言、
「変な奴」

「……………どういふ判子押したねん」

行動と言葉の差が理解出来ず、少年はガクツと肩を落とした。

ロングブローグ3 定理模索中

「さあ、どちらと戦いますか？」

「どっちも大して変わらんから気楽に選んでいいぞ」

工事現場等で普通に見かける一本の鉄パイプを肩に担ぐジョーカ
ーと、両手で器用に二本の果物ナイフをくるくると回して遊ぶチビ
が蛇腹剣を所持する銀寺に言った。

「その前に、何で二人とも末期な不良が持ちそうな武器なんだ？」

「仕様ですよ」

「仕様つて……大体斬つても大丈夫なのかよ？ 随分イメージとは
違うけど一応天使なんだろ？ あんまりそついうのと戦つてのも
……」

「ああ、『俺達』は外傷が付かないようにプログラミングされてる
からな。思う存分戦つてくれ」

「仕様ですよ」

淀みないジョーカーの返答に呆れた表情を浮かべる銀寺。

いくら傷付かないつて言つても女性を斬るのはなあ……絵面
的にマズイ。

かと言つて、チビはナイフ。多分、さっきの言い方だと俺は
普通に血が出るんだろつし……。

さて、どうするか。

どちらにするか悩む銀寺。その様を黒天使の二人はただただ見守
る。

その時、銀寺は異変には全く気付いていない。

二人の顔から、いつの間にか笑みが消え失せている事に。

「あ

「どうかしましたか？」

そうだ、これしかない！

俺つて頭つ良い〜！

妙案を思い付いた銀寺は思わず口元を緩め、そのまま言葉を放った。

「決められないからそっちが決めてくれ！」

キリリ、とした目をして堂々の選択放棄を宣言した銀寺。

その様に二人は顔を見合わせて、視線で語り合う。

一拍の時間を置き、前に足を踏み出したのは。

「なら、私がやりましょう」

鉄パイプをブンブンと左右に振り回して手に感覚を馴染ませるジョーカーが、ニコリと銀寺に社交的な笑みを投げる。

「おっけー、宜しく！」

いつからだろうか、この訳の分からない展開に銀寺は享楽染みた感情を抱くようになっていた。

女性を斬り付けるのはあんまり良くないけど怪我しないらしい……仕方ないんだよね

誰に宛ててでもない良い訳を頭に、数秒後に思い知るとつもない勘違いを胸に、銀寺は蛇腹剣の柄の底を左に回してワイヤーの口ツクを解除した。

「よし、二人とも準備は良いなあ」

チビが至極面倒そうな声色で二人、主に銀寺に向かって確認を取る。

「ああ」

短く返す銀寺。

喰らえば、かなり痛かったよな。

鉄パイプと言えども直撃すると普通に骨は折れるという、とある当時幼女がもたらしてくれた事件を思い出し、緩みそうな気を引き締める。

チビの何も握っていない右手がだらしなく上に拳がる。

「いくぞー、よーい」

やる気のないゴングは間近、特に構えなく地面に鉄パイプの先を向けるジョーカーを銀寺は見逃さないように真っ直ぐと見据える。

「どーん」

まるで今から百メートル走のタイムを測るのかと突っ込みたくなるような開始宣言。

だが、今から始まるのは下手をすると怪我では済まない試験であり、銀寺はチビの腕が下がるまで一瞬たりともジョーカーから目を離すことは無かったのだが、

「ぶっ!？」

アバラが軋む嫌な殴打音に、肺から一気に酸素が抜ける程の強打を貰った銀寺は後方に派手に吹き飛んだ。

「そうそう、現実世界よりは上乘せ式で体が丈夫になってるからちよつとやさそつとじゃ死なないぞー」

チビの忠告、しかしそんな声が耳には入るはずもなく銀寺は大量の武器を巻き込んで、動かない玩具の様に派手に白い世界を転がっていく。

なんだ、何がっ……。

「ホームラン」

鉄パイプを野球のバツティングの型で撲り振り抜いたジョーカーは楽しそうに口元を歪ませて、遠くの地面に力無く上を仰ぐ銀寺を眺める。

「世界を運営していると天使と言ってもストレスってものが結構溜まるんですけど、こういう形の発散しか許されてないんですよ、酷いと思いませんか？ 人間には労基法というものが有って良いですね、羨ましいです。平たく言うならば私は無休で二四時間労働ですからね。まあ、楽しい事もあります」

距離的には絶対に聞こえないであろう銀寺に向かってジョーカーは話し、歩くような速さで地面を進む。

白い世界には影が無い、故に移動しているジョーカーが浮いているのか、はたまた純粹に摩擦を無視して滑っているのかは分からないものの、銀寺との距離は着実に縮んでいく。

何が、あつたんだ。

胸が痛い、てか、どんだけ吹っ飛んでるんだよ俺……漫画か
つての。

いや、漫画と変わらないかこんな状況。

ファンタジーは小六で卒業、そう決めてたのに……まさかこ
んな事になるなんて……。

銀寺は痛む胸に手を当てて咳き込みながら白いだけの上を見詰め
る。

骨は折れていない、と確認した銀寺は何とか離さずに持っていた蛇
腹剣を握り締め、自分が転がってきた方向に目を遣った。

「試験時間は特に限りはありませんよ八〇九。貴方がもう一度死ぬ
か、諦めるか、合格するか、何れかをしないと永遠にでも続きます」
「けほっ、けほっ」

幽霊のような奇妙な移動方法で近付いてくるジョーカーを視界に
捉え、ゆっくりと上半身を起こしてから、白に震える腕を突いて銀
寺は立ち上がった。

辺りには変わらず武器類が等間隔で並んでおり、巻き込まれて銀
寺の足元に転がっていた棒状の武器、というよりは洗濯棒にしか見
えないそれが銀寺の踵に当たりカラン、と乾いた音を立てて白上を
転がる。

「こんな……派手にやられた、割にはっ！　そこまで痛く、無いん
だな」

「その割には息が荒れていますよ？」

「言っただろ……？　そこまで、って」

肩を上下に揺らし、口を大きく開けて息を吸い込むも、銀寺の肺
はそれでは足りないとはかりに酸素を要求し続ける。

距離を詰めていたジョーカーは、ちょうど蛇腹剣が届くか届かな
いかという辺りで止まり、ポンツと軽く右手の平と鉄パイプを打ち
合わせた。

「まあ、一発目を耐えたという事で休憩世界で使える魔術を一つ
教えましょう」

「……魔術？」

「ええ、実質この試験はその魔術を使わないと通れない、と言っても過言では無いので」

「魔術ってあれか？ ゲームとかでファイアとかサンダーって唱えて出すやつか？」

「簡単に言えばそんな物ですね。発動方法は簡単です」

そう言ってジョーカーは鉄パイプを上段に振り上げる。

「魔力カウンター？」

鉄パイプの先に、一つ一つが線のようになっている眩い閃光の塊が絡みつく。

銀寺は咄嗟に悟る。逃げなきゃヤバイ。

「聖断エクスキュロツシン！」

振り下ろされた鉄パイプが白い世界に衝突する。

その瞬間、フラッシュのような煌めきが一度銀寺の視界を完全に奪い、続いて起こった光の嵐が周囲を巻き込んで膨張していく。

光の筒に触れてはいけないと本能で悟った銀寺は飛び退くも「うわっ!？」と短く悲鳴を上げて堪らず地面に膝を屈し、腕をしっかりと付いて衝撃派の如き変則的な揺れに耐える。

「これが、この世界で使える魔術です」

「……………なっ……………あ」

点滅する視覚を手の甲で瞼を擦る事で矯正した銀寺は、前方を見て、実際には足元から始まるそれを見て、言葉を失った。

そこには、大きな十字型の空洞が出来ていた。

白い世界が焦げる臭い、小さな家くらいなら入りそうな程に深く抉られた地面。

それまでそこに並んでいた武器の数々は衝撃で四方へと飛び散っていた。

「まあ、私の場合は一応世界の管理を任されているのでここまでの

威力が出るのですが」

「あ……あ……」

言葉を成さない声が、銀寺の口から漏れ出す。足をガクガクと震わせ、畏怖の眼差しを再び鉄パイプを肩で担いで淡々と話すジョーカーに向ける。

「おや？ どうかしましたか、もしかして怖気付きましたか？ ふふ、というのは冗談で、貴方の様子をこれを見て腰を抜かす方は結構居るんですよ」

足を震わせる銀寺を、口元に手を当てて上品に笑いながらからかうジョーカーは「でも大丈夫です」と言葉を継続させる。

「私は手本で魔術を見せるだけで、試験中に魔術を使うのはこれが最初で最後です」

「そう、なのか」

一先ず安心し、ほっと胸を撫で下ろした銀寺は試験を続ける為に何とかその場に立ち上がってみせた。

「では、魔術の使い方を教えましょう」

「あ、ああ。宜しくお願いします」

「いきなり敬語にならなくても。もう使いませんよ」とも簡単に怯えてしまった自分を恥ずかしく思い、頬を赤らませた銀寺は悪態を付くも、深く弄るつもりもないジョーカーは二の句を継ぐ。

……チビが遙か遠くで笑い転げているのだが、二人は全く気付いていない。

「魔術は人と武器に因って千差万別です。最初は魔力カウンターのみしか使えません」

「さつきみたいに技名を言えば出るのか？」

「いえ、技名はカッコいいからですよ」

「……は？」

表情をこれまでになく輝かせてジョーカーは言い放った。

「せっかくのゲームなんですよ？ 魔力カウンター？！ だけだと

締まらないじゃないですか。例えばゲームをしていて○ボタンで炎、
で氷、 で雷、 ×で回復ってだけじゃ何だかお座成りな気がしま
せんか？」

「まずはお前の脳味噌を締めろよ」

こいつ、意外と危ない奴なのか？

鼻息荒く語り始めたジョーカーに思わず突っ込みを入れた銀寺は
緩みそうになる気を張り詰めようとする必死である。

「こほん、話が逸れましたね、失礼しました、少々熱くなってしま
つて。という事なので、最初は魔力カウンター？と言えば無条件で
発動しますよ。でも、そのうち技名を付ける事をお勧めします、是
非」

「りよ、了解」

気迫に押され、つい約束を交わしてしまった銀寺は気を持ち直す
ために目を瞑って深呼吸をする。

魔術。

良く分からないけど、本当にファンタジーな展開になってき
たな。

高鳴る鼓動、速る気持ちをなんとか頭の中で押さえ込む。

正直、楽しい！

ああ、本当なら叫び倒して狂喜に踊りたい！

手を開き、また閉じる。強がってもやはり少年か、銀寺の口角が
無意識に綻ぶ。

「この試験では私に一発でも攻撃を入れる事が出来れば合格になり
ます。武器、魔術問いませんが、例えどの武器を使用しても私
に当てる事は困難でしょうし、過去そうして合格した方は八〇八人
中たった二人です」

「二人……」

「さあ、発動させてみてください八〇九。その発動と同時に戦闘を
再開します」

ジョーカーは肩に担いでいた鉄パイプを中段に構え、再び感情の

無い眼差しで銀寺を射抜く。

戦闘の再開、結局最初に吹き飛ばされた時の攻撃動作が魔法ではないとすると、それを全く反応出来ていなかった銀寺の勝ち目は薄い。

やるしかないじゃないか。

さあ、出る！！

銀寺は蛇腹剣を両手で握り直し、ジョーカーの視線を強気に返す。
「来い！ 魔力カウンター?!！」

白い世界に、蛇腹剣に、そして銀寺の体にも、何も起こらない。

「魔力カウンター?!！」

再度言葉を放つも、何も起こらない。

「魔力クワァン むぎゅっ!！」

発音に気をおうと舌を巻いて言おうとした銀寺の腹部に、鉄パイプが叩き込まれた。

踏まれた小動物のような哀れな嗚咽を吐いて銀寺は白い世界を舞い、再び武器を巻き込んで地面を転がっていき、最後に大きな赤い盾に背中を激突させてようやく停止した。

「げほっ、ど、どという事だよ！ 魔術なんて出てないぞ！」

ダメージはあまり無かったのか、即座に立ち上がった銀寺は声を荒げ、地団太を踏む。

「いいえ、何かが発動しているはずですよ。私には分かりませんがね」

声と共に振り下ろされる鉄パイプ。銀寺はワイヤーをロックした蛇腹剣でそれを受け止めるも、続けて何発も叩き込まれる殴打から身を守るのに精一杯で、全く反撃の糸口を掴めない。

「それを見付けるのも、この試験の一環ですから」

「あっ」

下方から振り上げられた鉄パイプに絡め取られた蛇腹剣が銀寺の手を滑り抜けた。

「終わり、ですか」

回転しながら白い世界に綺麗な銀色の弧を描く蛇腹剣。

ジョーカーの口から出た、初めての否定的な言葉。

そして、銀寺の首元を深く抉り込む、純粹たる鈍器。

「うぐっ……あー！」

蛇腹剣と同様に世界を縦に回転しながら、地面に幾つもの半円を描く銀寺の体。

終わり、なのか。

今までに無い、明らかに人体の急所を壊す事が目的の殺人的な一撃を貰った銀寺は、ちょうど最初の地点でしゃがみ込んで二人の戦闘を見物していたチビの足元に文字通り滑り込んだ。

「ギブアップするか？」

チビの問い掛け。それは相手を小馬鹿にする色は一切含まれていない純粹な質問、提案。

首は変な方向に曲がっていたりはしていないものの、銀寺は俯せに地面に延びたまま何も答ええない。

「実は俺、お前みたいな面白い奴、結構好きなんだ」

「……………」

「生き物が生きてる世界、呼び名なんて特にないが仮に生界って呼ぶとする。生界では中間テストとか期末テストっていう勉強系の難しい試験があるよな」

「……………」

「その試験とかでよ、たまに試験作った奴のミスで難易度がかなり高くて解き難かったりする……いわゆる誤題とかが出る事あるんだよな。今回のこれも、それだ」

「……………」

「で、試験監督の先生が黒板とかにヒントとか、正しい問いを書いたりすると。今回の試験監督の先生は俺だ」

鉄パイプをぶら提げたジョーカーが今度は足を使い、二人の居る場所へと近付いてくる。

「ヒントだ、よく聞け」

コツ、コツ、ジョーカーの黒いハイヒールの足音が迫る。

「お前の能力は、直接攻撃を放つタイプじゃない、珍しいタイプだぞ」

チビは「どっこいしょういち」と口にしながら立ち上がり、銀寺を真つ直ぐと見下ろす。

「世界をよく見る。世界は八〇九、いや……福鳥銀寺の力で溢れているんだよ！！ 起きて見せる？ 餓鬼」

うるせえ。

チビの激昂に応えるように、右腕が白い地面に突き立てられた。

他人の事馬鹿にしまくって、今更良い奴ぶんのかよ。

左腕がグツ、と地面を突き離す。

ただ、

「頑張つて丸付けしてくれよ、先生」

「バーカ、てめえの正解箇所なんて今教えたとこだけだ」

口元から血を流す 口の中がパツクリと切れているのだろう

銀寺が歩くジョーカーに向かい、身を低くして駆け出した。

もちろん手には何も握られていない上、足取りは非常に重く覺束ない。

「答えを見せてもらいますよ、銀寺さん」

「合ってる自身なんか無いけどな」

鉄パイプを構えるジョーカーへ不敵な笑みを浮かべ、銀寺は直角に右へと曲がった。

ジョーカーもそれに合わせて方向を修正し、地面を蹴り上げる。

重力を完全に無視した水平の跳躍、足る銀寺の先へと一直線に飛ぶジョーカー。

武器が立ち並ぶ場所にて、銀寺は飛来するジョーカーを迎え撃つように足を横に踏み出して無理矢理に速度を殺し、迷わずに伸ばした右手で適当な槍を握った。

「聞いてなかったんですか？ 武器は一人一つ、それがこの世界のルールです」

風を切るジョーカーが眉根を顰めて銀寺に言う。灰煙が槍を掴む銀寺の手から上がり、同時に銀寺の脳髓にまで届く痛みが走る。

銀寺の顔が痛みには耐えかねて歪む。

「それはただの熱じゃありません、下手をするとまた死にますよ！」

理解の出来ない奇行にジョーカーはらしくなく、叫んでそれを制止しようとする。

だが、そんなジョーカーに戻ってきたのは鼻息程の小さな笑いだった。

「これで間違ってたなら中途半端じゃなく、清々しい馬鹿死因だろ。どうせ馬鹿なら、馬鹿らしく死ぬ！ 魔力カウンター?!！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3960z/>

休憩を終わらせる唯一つの方法

2011年12月14日19時57分発行